

# 大学入学試験に関する検討

## (2)

続 有 恒\*

- I. 問題
- II. 入学試験の全般的結果について
  - 1. 学力検査の結果
  - 2. 学力検査と合格, 不合格
  - 3. 科目選択と検査成績
  - 4. 教科・科目間の相関々係
  - 5. 調査書の結果
  - 6. 高等学校の成績と合格率
- III. 入学試験における学校差について
  - 1. 高等学校の格づけ
  - 2. 学校差と受験者構成
  - 3. 学校差と合格率
  - 4. 学校差と学力検査成績
- IV. 入学試験における「浪人効果」について
  - 1. 浪人の抽出
  - 2. 両年度の学力検査成績の比較
  - 3. 「浪人効果」と高等学校成績との関係
  - 4. 「浪人効果」と個人的特性など
- V. 要約と補足

### I 問 題

前年の報告に引続き、昭和39年度の本学入学試験について、若干の角度から検討を重ねたものである。本年度は特に、高等学校の学校差の問題、および、浪人における学力検査成績の向上の問題に重点をおいた。

### II 入学試験の全般的結果について

#### 1. 学力検査の結果

学力検査の各科目について、受験者全員の成績がどうなっているかを調査推定してみた。本年度志願者 3,636 名から無作為に抽出した 830 の標本によったものである。このうち、欠席者を除く受験者は784であった。受験者のうち、実業課程からの者は29名、検定試験による者1名である。

学力検査の成績は、表1に示したとおりであるが、前年度に比べかなりの違いがある。すなわち、素点の平均

を38年度と比較し、

(38年度平均) — (39年度平均)

を各教科、科目ごとに求めてみると、

国 語	+11.0	}	社 会	-12.4
社会科	- 7.5		日 本 史	-12.1
数 学	- 9.2	}	世 界 史	+ 2.9
理 科	+ 0.7		人 文 地 理	+ 3.7
外国語	+33.4	}	物 理	+ 1.5
			化 学	+ 0.3
総 点	+24.5		生 物	- 1.1
			地 学	+ 8.4

となり、本年度は外国語および国語の検査が難かしく、社会および日本史の検査がやさしかったといえる。

5教科の間の比較でも、

社会 > 理科・国語 > 数学・外国語

となっており、38年度とはかなり異なっている。

\*本報告は本学における昭和39年度入学試験委員会の調査書委員会が、入試判定の資料作成の途次に行なった作業結果を基として、筆者が検討したものである。調査書委員は筆者のほか、文学部横瀬教授、内山助教授、教育学部塩田助教授、教養部村上助教授、勝部講師であり、鈴木康平、荻野惺、平野典子の各助手を補助委員とした。

大学入学試験に関する検討

このように学力検査の総点および教科、科目別の平均点が年度によって異なることは、毎年度の受験生の学力が年度によって大巾に変動するとは考えられないから、検査問題の側の質や程度が異なるのだと考えなければならない。

別の言い方をすれば、学力検査は、各受験生の、各教科、科目についての学力全体を推定するためのものであり、検査問題は、その推定のための標本 (sample) である。したがって、標本の数で十分でなかったり、標本が偏った領域からだけ抽出されていたりすれば、標本値からの推定は過誤を多分に含むこととなる。年度によって、全受験生の平均得点変動することは、その意味での標本数が不十分であるか、あるいは、標本抽出の領域が年度によって偏るか、または、その両者がともに起っているかなどのうちのどれかである。

このように考えれば、毎年度の学力検査が何を測定し

ているのかを十分に吟味してみる必要があることを否定できなくなる。このための吟味は簡単ではないが、後に浪人についての検査成績の分析によって、若干試行しておいた。その点はそこで再び触れる。

次に、各教科の得点を合計して総点を求め、この大小によって受験生の成績順位を決定する慣行について、今回も触れておかなければならない。すなわち、国語の64点と、外国語の64点 (平均点である) とは意味がちがうことは、前報告でも触れたとおりである。さらに、昨年度外国語で97点 (平均点である) をとった者が、今年再度受験して64点であったとき、俗には「今年は外国語の成績がさがった」というが、それは正しくない。いうまでもなく、彼は、昨年も今年も外国語の成績はともに平均程度であったのであって、成績は上りも下りもしなかったわけである。

このような点を不合理でないように処理するために

表1 教科科目別の学力検査平均点

教科	平均	標準偏差	科目	平均	標準偏差	標本数
国語	94.78	22.97				784
社会科	122.82	23.74	社会	73.96	14.02	132
			日本史	66.31	12.68	611
			世界史	55.30	15.21	468
			人文地理	57.02	12.21	253
数学	78.84	36.37				784
理科	99.69	33.79	物理	45.34	19.26	502
			化学	53.14	22.04	741
			生物	49.00	13.66	299
			地学	41.06	18.45	20
外国語	64.02	28.87				784
総点	460.7	110.7				784

は、学力検査の素点を標準点 (T得点) に換算しなければならない。いま、表1から、国語、数学、外国語については、標準点  $T_2$  (平均100, 標準偏差20の分布への換算点) へ、社会科および理科については、それぞれに属する4科目別に標準点  $T_1$  (平均50 標準偏差10) へ換算すると、それぞれの教科、科目の素点は、表2および表

3に示したように換算される。

この換算のための表を作成することは比較的簡単な作業であるし、電子計算機を利用すれば、極めて短時間にすべての素点の換算が行われる。素点を単純に合計するというような不合理を改革するのには、大した労力はいらないのである。

表2 T<sub>2</sub>-Score 換算表

素点	英語	国語	数学	素点	英語	国語	数学	素点	英語	国語	数学
180			156	120	139	122	123	60		<b>70</b>	<b>90</b>
179			155	119	138	121	122	59	97	69	89
178			154	118	137	<b>120</b>	121	58	96	68	88
177			153	117	136	119	120	57	95	67	87
176			152	116	135	118	119	56	94	66	86
175			151	115	134	117	118	55	93	65	85
174	176		150	114	133	116	117	54	92	64	84
173	175		149	113	132	115	116	53	91	63	83
172	174		148	112	131	114	115	52	90	62	82
171	173	166	147	111	130	113	114	51	89	61	81
170	172	165	146	110	129	112	113	50	88	60	80
169	171	164	145	109	128	111	112	49	87	59	79
168	170	163	144	108	127	110	111	48	86	58	78
167	169	162	143	107	126	109	110	47	85	57	77
166	168	161	142	106	125	108	109	46	84	56	76
165	167	160	141	105	124	107	108	45	83	55	75
164	166	159	140	104	123	106	107	44	82	54	74
163	165	158	139	103	122	105	106	43	81	53	73
162	164	157	138	102	121	104	105	42	80	52	72
161	163	156	137	101	120	103	104	41	79	51	71
160	162	155	136	100	119	102	103	40	78	50	70
159	161	154	135	99	118	101	102	39	77	49	69
158	160	153	134	98	117	100	101	38	76	48	68
157	159	152	133	97	116	99	100	37	75	47	67
156	158	151	132	96	115	98	99	36	74	46	66
155	157	150	131	95	114	97	98	35	73	45	65
154	156	149	130	94	113	96	97	34	72	44	64
153	155	148	129	93	112	95	96	33	71	43	63
152	154	147	128	92	111	94	95	32	70	42	62
151	153	146	127	91	110	93	94	31	69	41	61
150	152	145	126	90	109	92	93	30	68	40	60
149	151	144	125	89	108	91	92	29	67	39	59
148	150	143	124	88	107	90	91	28	66	38	58
147	149	142	123	87	106	89	90	27	65	37	57
146	148	141	122	86	105	88	89	26	64	36	56
145	147	140	121	85	104	87	88	25	63	35	55
144	146	139	120	84	103	86	87	24	62	34	54
143	145	138	119	83	102	85	86	23	61	33	53
142	144	137	118	82	101	84	85	22	60	32	52
141	143	136	117	81	100	83	84	21	59	31	51
140	142	135	116	80	99	82	83	20	58	30	50
139	141	134	115	79	98	81	82	19	57	29	49
138	140	133	114	78	97	80	81	18	56	28	48
137	139	132	113	77	96	79	80	17	55	27	47
136	138	131	112	76	95	78	79	16	54	26	46
135	137	130	111	75	94	77	78	15	53	25	45
134	136	129	110	74	93	76	77	14	52	24	44
133	135	128	109	73	92	75	76	13	51	23	43
132	134	127	108	72	91	74	75	12	50	22	42
131	133	126	107	71	90	73	74	11	49	21	41
130	132	125	106	70	89	72	73	10	48	20	40
129	131	124	105	69	88	71	72	9	47	19	39
128	130	123	104	68	87	70	71	8	46	18	38
127	129	122	103	67	86	69	70	7	45	17	37
126	128	121	102	66	85	68	69	6	44	16	36
125	127	120	101	65	84	67	68	5	43	15	35
124	126	119	100	64	83	66	67	4	42	14	34
123	125	118	99	63	82	65	66	3	41	13	33
122	124	117	98	62	81	64	65	2	40	12	32
121	123	116	97	61	80	63	64	1	39	11	31
	122	115	96		79	62	63	0	38	10	30

表3 T<sub>1</sub>-Score 換算表

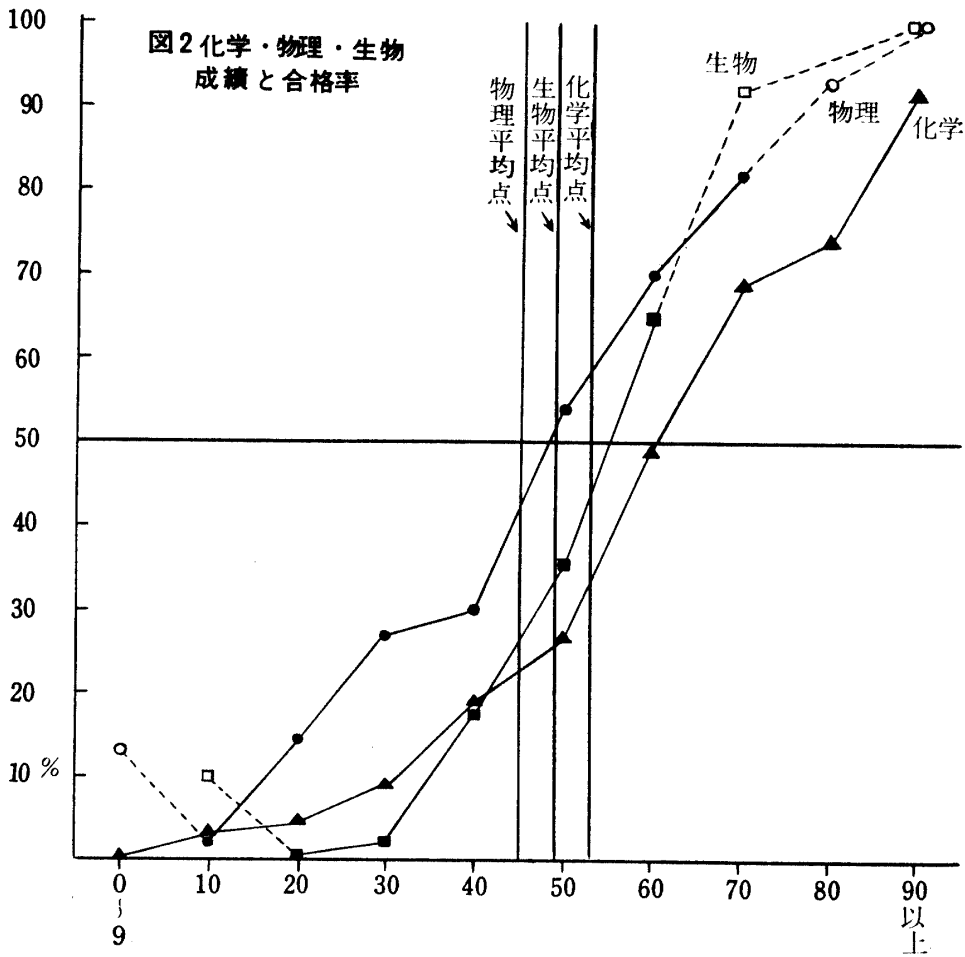
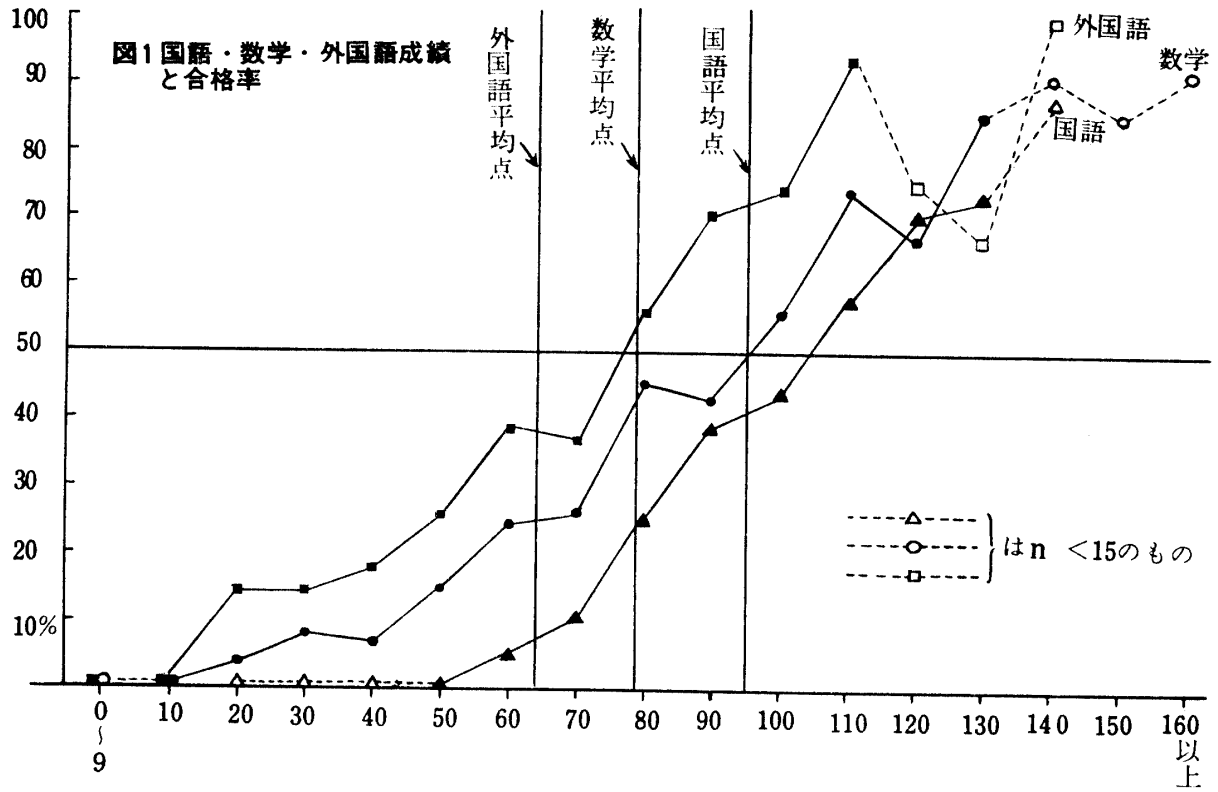
素点	物 理	化 学	生 物	地 学	社 会	日 本 史	世 界 史	人 文 地 理
100					69	80	79	
99	78	71	87		68	76	75	
98			86		67	75	78	
97	77	70	85		66	74	77	
96			84		65	73	76	
95	76	69			64	72	75	
94			83		63	71	74	
93	75		82		62	70	73	
92		68			61	69	72	77
91	74		81		60	68	71	76
90		67	80		59	67	70	75
89	73				58	66	69	74
88		66	79		57	65	68	73
87	72		78		56	64	67	72
86		65	77		55	63	66	71
85	71				54	62	65	70
84		64	76		53	61	64	69
83	70		75		52	60	63	68
82		63	74		51	59	62	67
81	69				50	58	61	66
80		62	73		49	57	60	65
79	68		72	71	48	56	59	64
78		61	71	70	47	55	58	63
77	66		70	69	46	54	57	62
76		60	69	68	45	53	56	61
75	65				44	52	55	60
74		59	68	67	43	51	54	59
73	64		67	66	42	50	53	58
72		58	66	65	41	49	52	57
71	63		65	64	40	48	51	56
70		57	64	63	39	47	50	55
69	62		63	62	38	46	49	54
68		56	62	61	37	45	48	53
67	61		61	60	36	44	47	52
66		55	60	59	35	43	46	51
65	60		59	58	34	42	45	50
64		54	58	57	33	41	44	49
63	59		57	56	32	40	43	48
62		53	56	55	31	39	42	47
61	54		55	54	30	38	41	46
60		52	54	53	29	37	40	45
59	58		53	52	28	36	39	44
58		51	52	51	27	35	38	43
57	56		51	50	26	34	37	42
56		50	50	49	25	33	36	41
55	55		49	48	24	32	35	40
54		48	48	47	23	31	34	39
53	54		47	46	22	30	33	38
52		46	46	45	21	29	32	37
51	53		45	44	20	28	31	36
		44	44	43	19	27	30	35
		43	43	42	18	26	29	34
		42	42	41	17	25	28	33
		41	41	40	16	24	27	32
		40	40	39	15	23	26	31
		39	39	38	14	22	25	30
		38	38	37	13	21	24	29
		37	37	36	12	20	23	28
		36	36	35	11	19	22	27
		35	35	34	10	18	21	26
		34	34	33	9	17	20	25
		33	33	32	8	16	19	24
		32	32	31	7	15	18	23
		31	31	30	6	14	17	22
		30	30	29		13	16	21
		29	29	28		12	15	20
		28	28	27		11	14	19
		27	27	26		10	13	18
		26	26	25		9	12	17
		25	25	24		8	11	16
		24	24	23		7	10	15
		23	23	22		6	9	14
		22	22	21			8	13
		21	21	20			7	12
		20	20	19			6	11
		19	19	18				10
		18	18	17				9
		17	17	16				8
		16	16	15				7
		15	15	14				6
		14	14	13				5
		13	13	12				4
		12	12	11				3
		11	11	10				2
		10	10	9				1
		9	9	8				0
		8	8	7				
		7	7	6				
		6	6	5				
		5	5	4				
		4	4	3				
		3	3	2				
		2	2	1				
		1	1	0				
		0	0					

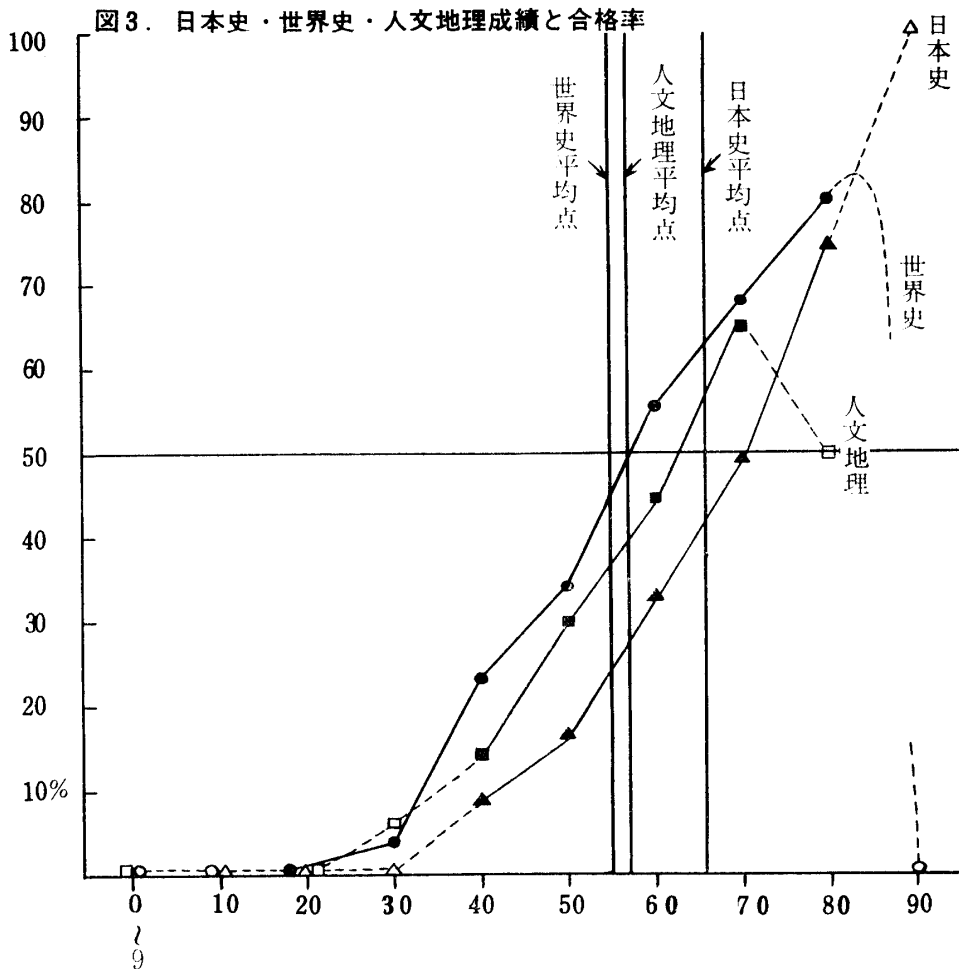
素点	物 理	化 学	生 物	地 学	社 会	日 本 史	世 界 史	人 文 地 理
50					33	37	47	44
49	52	49	51	55	32	36	46	43
48		48	50	54	31	35	45	42
47	51		49	53	30	34	44	41
46		47	48	52	29	33	43	40
45	50		47	51	28	32	42	39
44		46	46	50	27	31	41	38
43	49		45	49	26	30	40	37
42		45	44	48	25	29	39	36
41	48		43	47	24	28	38	35
40		44	42	46	23	27	37	34
39	47		41	45	22	26	36	33
38		43	40	44	21	25	35	32
37	46		39	43	20	24	34	31
36		42	38	42	19	23	33	30
35	45		37	41	18	22	32	29
34		41	36	40	17	21	31	28
33	44		35	39	16	20	30	27
32		38	34	38	15	19	29	26
31	43		33	37	14	18	28	25
30		40	32	36	13	17	27	24
29	42		31	35	12	16	26	23
28		39	30	34	11	15	25	22
27	41		29	33	10	14	24	21
26		38	28	32	9	13	23	20
25	40		27	31	8	12	22	19
24		37	26	30	7	11	21	18
23	38		25	29	6	10	20	17
22		36	24	28		9	19	16
21	37		23	27		8	18	15
20		35	22	26		7	17	14
19	39		21	25		6	16	13
18		34	20	24			15	12
17	40		19	23			14	11
16		33	18	22			13	10
15	34		17	21			12	9
14		32	16	20			11	8
13	35		15	19			10	7
12		31	14	18			9	6
11	36		13	17			8	5
10		30	12	16			7	4
9	37		11	15			6	3
8		29	10	14			5	2
7	30		9	13			4	1
6		28	8	12			3	0
5	31		7	11			2	
4		27	6	10			1	
3	32		5	9			0	
2		26	4	8				
1	27		3	7				
0		26	2	6				

2. 学力検査と合格不合格

実際の入学試験結果の判定に当っては、ほとんど99%以上に、学力試験の各科目の成績の合計（総点）が使用される。各学部の競争率その他によって、合格者の最低

点はかなりの開きがあるが、それをそのまま素朴に受けとって、合格した者と不合格の者とに分け、学力検査の各教科科目についてその成績ごとの合格率を図示してみると、図1～図3に示したようになっている。ただし、地学と社会とは標本数が少ないので省略した。





この結果によれば、どの教科においても、学力検査成績のいい者ほど合格率が高くなっていて、その限りでは、各教科の成績と合格・不合格との間には相関関係があるといえる。しかしながら、各教科科目ともに、それぞれの平均成績以下の者が合格していることは、学力検査の総点主義について再考する必要があることを示している。

例えば、外口語において、200点満点のうち49点以下の成績の者が11.8%も合格していることは、外国語という教科が他の教科と同等に重視されるならば、到底英語の力ありとはいえない者を入学させていることであって、入学試験は、大学において十分に学習していける見込みのある者を選抜するものである、という本質に反するものである。

毎年、教養部の外国語担当教官からは、外国語の検査成績がはなはだしく劣っている者（例えば、上記の程度の者）は合格させないように、との要望がなされながら、結局、上図のような者たちが合格させられていくのは、単純な総点の大小による順位によって、安易に判定が行われるからにほかならない。

どの教科科目についても、外国語と同様に、その科目について十分な学力ありとは認めることのできない最下限の成績というものはあるわけである。そのような成績以下の者を排除することをしなければ、一方では満点ちかい成績をとっている者があるのに、他方では、ほとんど0点にちかい成績の者も、他の科目で点をかせげば合格させることになり、要するところ、大学入学のための最低水準はきめられないことになってしまう。

他方、テスト問題作成の側についていえば、このような検査得点別の合格率を問題にする場合、その合格曲線は緩傾斜のものではないのであって、図2における「生物」の場合のように、急傾斜するようなものでなければならない（この「生物」の場合は最低にちかい点の者が合格しているのでまずいが）。理想的には、ある点以上は全部合格し、ある点以下は全部不合格になるような問題が作成されなければならないわけである。

### 3. 科目選択と検査成績

社会科および理科については、教科目のなかから2科目を選択受験することになっている。先の表1に示した

個 人 研 究

ように、科目によって平均成績に差がある（いわゆる難易の差がある）と、どの科目を選んだかによって、総点にひびき、合否がわかれてくる。この問題を調整するためには、表2、3に示したように、素点を標準点に換算するほかはない。

ところで、その問題とは別に、社会科および理科のうち、どの科目を選んだかによって、他の教科の成績に既

に差があるという傾向があるやにいられている。そこで、ここでは、この検討に利用した784のサンプルについて、科目選択がどのようになっているかを調べ（表4）、それぞれの選択別によって、他の教科の成績に差があるかどうかをみることにした（表5）。

まず、科目の選択状況がどうなっているかを整理してみると、表4にみるとおり、科目選択はかなり偏ってい

表4 科目選択状況

理 科	社 会 科	日 本 史	世 界 史	日 本 史	社 会	社 会	社 会	理 科 計
		と 世 界 史	と 人 文 地 理	と 人 文 地 理	と 日 本 史	と 人 文 地 理	と 世 界 史	
物理	化学	275*	78*	60*	35*	23*	10	481
化学	生物	151*	25*	32*	32*	16	6	262
物理	生物	10	3	1	3	3	1	21
生物	地学	2	5	5	—	—	1	13
化学	地学	3	—	—	1	1	—	5
物理	地学	1	—	1	—	—	—	2
社会科 計		442	111	99	71	43	18	784

る。理科では、物理および化学を選ぶ者と、化学および生物を選ぶ者とで全体の94.8%になり、社会科では、日本史および世界史を選ぶ者、世界史および人文地理、または、日本史および人文地理を選ぶ者とで全体の70.4%になる。

これらのなかで、表4に\*印をつけたもの、すなわち、理科と社会科との科目選択の結果が同一の者20名以上ある選択組合せについて、すべての受験者が等しく受けている、外国語、国語、数学の検査成績を、平均によって比較してみると表5に示すようになる。

表5 科目選択と他教科の検査成績

科 目 選 択 (標本数)	外 国 語 成績平均	国 語 成績平均	数 学 成績平均	成績平均の 合 計
物理・化学・日本史・世界史 (275)	63.0 ⑥	94.0 ④	86.0 ④	243.0 ③
化学・生物・日本史・世界史 (151)	69.1 ②	98.3 ②	68.3 ⑦	235.6 ⑥
物理・化学・世界史・人文地理 (78)	68.0 ③	93.0 ⑦	87.8 ⑮	248.8 ①
物理・化学・日本史・人文地理 (60)	56.8 ⑧	93.3 ⑤	87.8 ⑮	237.9 ④
物理・化学・社会・日本史 (35)	52.8 ⑨	87.9 ⑨	80.2 ⑤	220.9 ⑨
化学・生物・日本史・人文地理 (32)	66.7 ④	93.3 ⑥	76.1 ⑥	236.1 ⑤
化学・生物・社会・日本史 (32)	63.9 ⑥	94.2 ③	66.7 ⑨	224.8 ⑧
化学・生物・世界史・人文地理 (25)	72.9 ①	104.9 ①	67.3 ⑧	245.1 ②
物理・化学・社会・人文地理 (23)	58.0 ⑦	91.0 ⑧	86.2 ③	235.2 ⑦
全 標 本 の 平 均	64.0	94.8	78.8	—

ゴチツクは全標本の平均より高い平均であることを示す。

○内の数字は順位を示す。

この表で明らかなように、1位と9位との間には明らかな差があり、科目選択の如何によって、国語、数学、外国語のような、いわば「道具的教科」の成績において

優れた群と劣った群とに振り分けることが可能なようにみえる。もっとも、理科系学部の実験者の大半は、理科において、物理および化学を選択するし、文科系学部の

## 大学入学試験に関する検討

受験者の過半数は化学および生物を選択するからして、物理と化学を選んだ者の方が数学の成績がよく、化学と生物を選んだ者の方が外国語の成績がいい、といっても、それは、文科系に進む者と理科系に進む者との差が出ているだけだといえないこともない。しかし、それにしても、受験のときに選択するという意味で「得意な科目」によって差が認められる点は注目しておいていいことである。

これは、学力検査の受験科目指定の問題につながってくるのであって、1966年度以降の方針に参考となるものである。

### 4. 教科・科目間の相関関係

科目選択の傾向が、「道具的教科」の検査成績に関係がありそうだとするところから、科目指定の方針に関する参考資料がえられるかも知れないと考えられるが、これについては、教科、科目間の検査成績の間の相関関係を調べてみることも役に立つ。このことは、その上、学力検査そのものや、検査成績の解釈、取扱いについても参考になるであろう。

一般に、学力検査の教科、科目は、それぞれ異なった側面に関する学力をみるためのものであると考えられるが、同じ理科や社会科のなかで、任意の2つの科目を選択させることは、同じ教科のなかの異なった側面を検査することを意味するから、異なった科目選択の結果を、同じ教科の学力だとして取扱うことは、理論上矛盾を含むものである。

また、教科間の検査成績の取扱いにしても、それらが異なった面の学力を検査したものであるのならば、単純

に成績を合計して、総点を出すことは、意味を成さない。しかし、他方、異なった面の学力であるといっても、一方で優れている者ほど他方では劣っているという逆相関の関係はありそうにも思えない。因子分析的には、一般学力という共通因子がありそうに考えられる。

これらの点を吟味するために、「社会」および「地学」を除く、すべての教科、科目間の相関係数を計算してみた。これらの係数算出のもとになった受験者数は、表4からも理解されるとおり、科目の組合せで異なるから、因子分析をすることはできないが、得られた相関行列から概略を推察することはできよう。

計算結果は表6に示した通りである。このうち、物理と生物との相関係数は標本数が少ないので計算しなかった。この結果にもとずき、相関係数が+0.45以上、+0.5以上、+0.55以上の4段階に大別して、教科、科目間の関係を図示してみると図4のようになる。この図から考えて、教科、科目を指定するとすれば、相関関係の高い教科は一方を省略するとして、一例としては、

数学  
物理、生物  
人文地理、日本史  
外国語または国語

ということになるであろう。

それにしても、教科、科目間の相関係数はどれも有意であって、因子分析的には、十分共通因子が考えられる。その他に、外国語、国語を含む語学的因子、世界史、日本史、人文地理を含む社会的因子、数学、物理、化学を含む数物的因子の抽出が可能ないように見える。

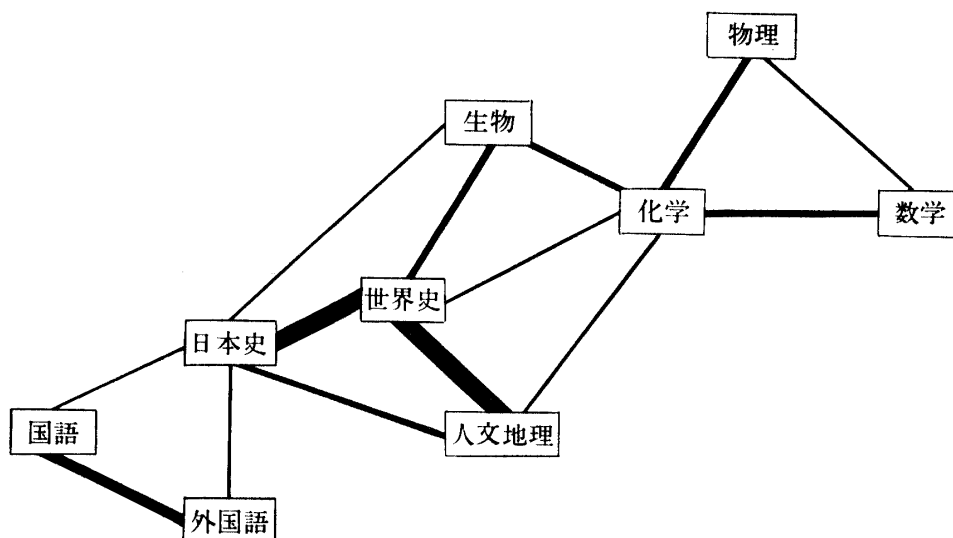
いずれにせよ、このような相関関係をもつ教科、科目

表6 教科科目間の相関行列

		国語	外国語	日本史	人地文理	世界史	生物	化学	物理	数学
数	学	.288	.338	.247	.254	.228	.327	.456	.407	*
物	理	.317	.324	.340	.341	.339	—	.486	*	.407
化	学	.345	.361	.385	.426	.402	.477	*	.486	.456
生	物	.365	.345	.417	.326	.481	*	.477	—	.327
世	界	.371	.381	.602	.585	*	.481	.402	.339	.228
人	文	.312	.290	.472	*	.585	.326	.426	.341	.254
日	本	.410	.419	*	.472	.602	.417	.385	.340	.247
外	国	.504	*	.419	.290	.381	.345	.361	.324	.338
国	語	*	.504	.410	.312	.371	.365	.345	.317	.288



図4 教科、科目間の関係模型



の検査成績の総合は、単純な和の形で求めるのは誤りであって、各教科の検査が測定するものは、共通因子としての一般学力に関しすべて正の方向に傾斜しながら交わる異なった次元の学力であると考えらるべきであるから、合力計算の方式を採用すべきであるといわなければならない。

このように考えてくると、検査結果の処理手続きには、何としてでも計算機械を導入しなければならない。その方式をとらないとすれば、各教科、科目、または、そのグループごとに、合格の基準を何段階かに分けて設定しておき、その上級の基準に達している者から順次合格させていくことになる。

実は、入学試験は、受験者の順位を決定することが目的ではなくて、全受験者を合格と不合格とに2分することが真の正しい目的であるから、そのためには、すべての教科、科目の成績を合計することは必然的な仕事ではないわけである。

### 5. 調査書の結果

調査書については、昨年度の結果からして、高等学校最終学年における全教科科目の評価平均と、学力検査に含まれる5教科の、全学年にわたる評価平均とを利用することとした。

まず、高等学校最終学年の全教科科目の評価平均については、全志願者からの無作為標本499によると、表7に示したようになる。この表によって明らかのように、全体としてみれば、普通課程、職業課程、定時制の順に在学中の成績は悪く、また、現役、一浪、二浪、(二浪以上をも含む)の順に劣っている。全標本についての評

価平均の平均は、昨年度のそれ(平均3.76, 標準偏差0.52)に比べ、ほとんど完全に一致している。高等学校での成績を中心にしてみれば本学への志願者のレベルはほとんど固定しているといえそうである。

さて、この評価平均と標準偏差によって、高等学校最終学年の全教科の評価平均を、表7の右側列に示すように、A~Jの10段階に分けた。いわゆる高等学校の「学校差」を考えるならば、これ以上細かい段階分けは誤差を大きくし過ぎるであろう。この成績段階を示す記号は、入学試験結果の最終判定資料に記載され、各学部の判定委員の利用に供した。学力検査において、学力の差が有るとはいえない者たちについては、高等学校在学中の成績によって判定するのが、当面のところ、最も合理的であると考えられる。

次に、国語、社会、数学、理科、外国語の5教科について、高等学校在学中の毎学年の評価の平均と、その評価平均の3~4ヶ年間の平均とから、表8を作成した。この結果も、前年度と差はない。すなわち、5教科全学年の評価平均の平均は、前年度は3.74であり、標準偏差は0.69であって、今年度のそれとの間に差を認めることはできない。

5教科の毎学年の評価平均が、高等学校在学中に、年々上昇したか、下降したかについても表8に示す通りであるが、昨年度と比較してみると、評価平均3.6~4.0の者について、昨年度は、上昇23.0%, 下降23.0%であったが、本年度は、上昇33.5%, 下降21.6%で、差ありとはいえない。

このように年々の志願者について、高等学校在学中の学業成績による指標が、等しいか、または、大差がない

大学入学試験に関する検討

表7 高等学校最終学年の全教科評価平均（人数）

評価平均	普通課程				職業課程				定時制				段階
	現役	一浪	二浪	計	現役	一浪	二浪	計	現役	一浪	二浪	計	
5.0													A
4.9		2		2									
4.8	9	2		11		1		1					
4.7	7			7			1	1					B
4.6	14	5		19									
4.5	9	2		11					1			1	
4.4	21	3	1	25		1		1					C
4.3	23	8	1	32									
4.2	14	4	2	20	1		1	2					
4.1	18	6	1	25					1			1	D
4.0	23	7	3	33	1			1					
3.9	28	7		35			2	2			1	1	
3.8	14	9	2	25		1		1					E
3.7	14	7	1	22	2			2					
3.6	18	8	2	28			1	1			1	1	F
3.5	17	8	5	30		1		1					
3.4	18	8	3	29			1	1					
3.3	15	11	1	27	1		2	3	2	1		3	G
3.2	9	7		16		2		2					
3.1	14	8	4	26		1		1					
3.0	8	4	5	17						1		1	H
2.9	5	3	2	10		1		1					
2.8	4	2		6	1			1					
2.7	1	1	1	3									I
2.6													
2.5													J
2.4	3	1	1	5		1		1					
2.3		1	1	2						1		1	
2.2						1		1					
評価平均の平均												3.76	
標準偏差												0.55	

とすれば、これらを一層活用して、入学者選抜に役立てることができる。すなわち、調査書による判定基準が恒常的に設定でき、基準設定の労力や時間が省略できるばかりでなく、過去の入学者についても、入学後の修学状況と高等学校時代の成績とをつき合せ、同じ基準によ

て予見の可能性を検討することができるからである。このような検討は、明年度をまっけて行ない、さらにこれらの指標の恒常性を確かめ、追跡研究の一端として実施する考えである。

表8 5教科全学年の評価平均と毎学年の変動  
(人数)

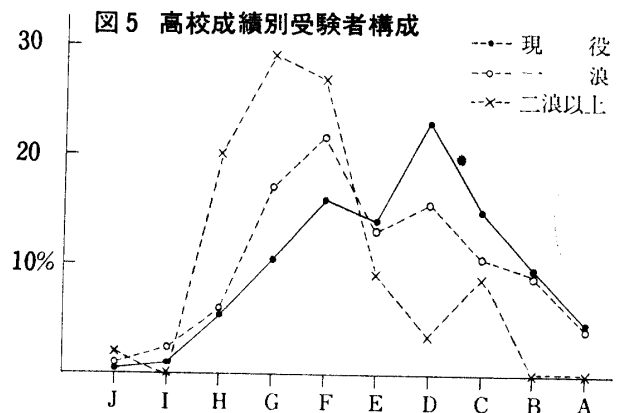
評価平均	上昇	不定	下降	計
5.0		2	1	3
4.9	1	3	2	6
4.8	3	5	3	11
4.7	1	7	7	15
4.6	9	8	7	24
4.0	3	11	2	16
4.4	7	16	3	26
4.3	7	13	4	24
4.2	7	14	8	29
4.1	15	14	4	33
4.0	3	9	2	14
3.9	9	8	6	23
3.8	14	15	14	43
3.7	7	7	5	19
3.6	8	22	5	35
3.5	13	10	8	31
3.4	3	15	4	22
3.3	7	11	3	21
3.2	6	12	5	23
3.1	7	8	4	19
3.0	3	6	2	11
2.9	8	14	4	26
2.8	1	9	1	11
2.7		1		1
2.6	1		2	3
2.5		4		4
2.4	1	2		3
2.3			1	1
2.2		1		1
計	144	247	107	498
評価平均の平均				3.78
標準偏差				0.60

6. 高等学校での成績と合格率

先に、学力検査の各教科、科目の成績と合格、不合格との関係をみたが、それと同じようにして、前節で示した、表7の学業成績段階によって合格率がどのように推移しているかをみてみよう。もちろん、学力検査の場合には、各教科、科目の検査成績が合否に、つまり検査の

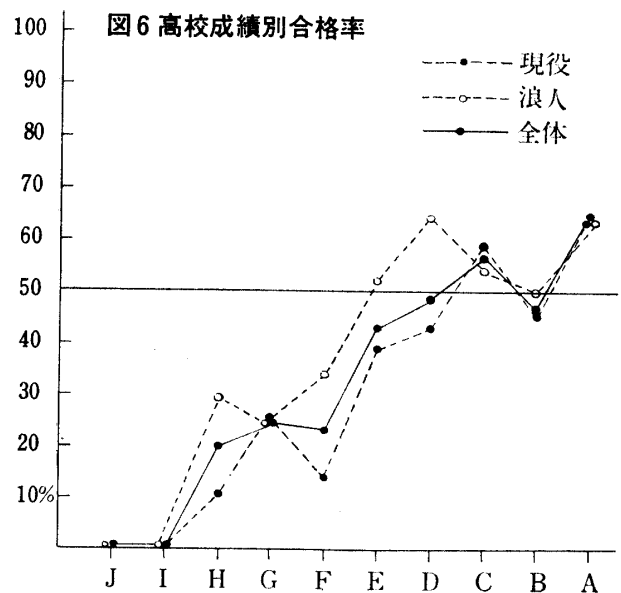
総点にどの程度寄与しているかをみるのが目的であったが、高等学校での在学中の成績段階については、むしろこれと、学力検査との関係がどの程度であるかをみるためのものである。

さて、その前に、高等学校での成績別にみた場合、現役、一浪、二浪以上によって、受験者の相対頻度はどのようになっているであろうか。表7の場合とは別の標本によって、整理してみると、図5に示すようになる。この図において、現役の受験者は482名(64.0%)一浪は216名(28.7%)二浪以上は55名(7.3%)であった。



これによってみると、浪人組では、高等学校在学中の成績のよくない者、F、G、Hの段階の者が相対的に多くなっており、成績のいい者、A、B、C、Dの段階の者が少ないことが明らかである。

2年浪人以上の者は少ないので、現役と浪人とに分け、それぞれの成績段階の者が、実際にどの程度合格し



大学入学試験に関する検討

たかを整理してみると、図6がえられる。この結果からすれば、高等学校最終学年における全教科科目の評価の平均（その段階）が、大学の合格、不合格と無関係ではないようであるが、しかし、図2および図3などと比較してみれば、その関係は必しも十分だとはいえないことは明らかである。

高等学校の最終学年における成績段階と、入試学力検査点との相関係数は、後に示すように、現役受験者において+0.520~0.530、浪人受験者においては+0.340~0.370程度であって、無相関とはいえないが、十分に高い相関関係であるともいえないのである。

このような結果だけからは、入学試験の学力検査がいか、高等学校での学業成績がいかを論ずることはできない。学力検査という、短時間、1回の少数標本問題による学力推定の誤差と、受験技術の習練からくる非本質的、一時的学力強化の歪みとを、高等学校における評価に含まれる若干の主観的偏りと、いわゆる学校差に由来する誤差とに対比して、いずれが誤差と歪みが少ないかは俄かに断定することは難しい。教育的に見れば、学力検査を軽視して、高校成績による判定の参考程度に取扱うことが望ましいが、入学者の選抜技術としては、結局のところ、入学後の実績に照らして、部分的にせよ実証的資料による検討がなされなければならない。

Ⅲ 入学試験における学校差について

1. 高等学校の格づけ

大学の入学試験方法に関しては、つねに、高等学校の学校差、格差が問題になり、これをどう処理するかが最大の困難点とされている。しかし、その学校差なるものが、もし、高等学校へ入学してくる生徒の質の差を意味するのであれば、これを解消する方法は無いわけではない。そして、また、高等学校の生徒の質が、何に基づいて主張されるかといえ、中学校からの進学に際しての学力検査その他の成績によっているのであるから、それは、恒久的なものではありえない。というのは、集団のなかでの位置、役割が子どもの成長発達にかなりの効果を及ぼすからである。つまり、「鶏頭」は「牛後」よりも伸びるのである。それはともかくとして、高等学校へ入学する子どもの質を均質化しようとするれば、大学が、高等学校在学中の成績その他を重視し、これを中心にして入学者を選抜することを公表すれば、中学校から高等学校への進学状況は変って来るに違いない。つまり、小学区制のようになってくるはずである。

さて、高等学校の学校差は、一方では、大学への入学者の多少によって、世間的には決められている。沢山の

入学者を出す高等学校が優秀なのだといわれるのである。この意味での学校差は、生徒の質と、学校の教育体勢（教師の質を含めて）とに依存しているだろう。受験技術の指導がうまく行われていけば、大学入学者は増加する。しかし、そればかりでなく、世間でいう優秀校は、もともと生徒数が多いという事実がある。一学年700名からいる高等学校と、一学年100名しかいない学校とでは、はじめから勝負はきまっている。前者では2割が進学し、後者では全員が合格しても、そこに入学者数では40名の差があるわけである。

本論文では、以下において、世間でいう有名校と、そうでない学校とを比較していくが、本来、学校の、大学進学に関する格づけは、大学進学者数と卒業生全数との

表9 各高等学校出身者の合格率

順位	学校名	所在地	合格率	合格者全数*
1	大垣北	岐阜	(70.0)	
2	刈谷	愛知	63.6	40(12.5%)**
3	岐阜	岐阜	58.2	80(16.0%)
4	明和	愛知	56.0	161(31.0%)
5	時習館	愛知	53.6	51(12.3%)
6~8	旭ヶ丘	愛知	50.0	159(31.2%)
"	伊勢	三重	(50.0)	
"	半田	愛知	(50.0)	31( 8.8%)
9	向陽	"	43.8	31( 8.5%)
10~11	熱田	"	(42.9)	
10~11	津	三重	42.9	
12	四日市	"	40.0	50(10.1%)
13	東海	愛知	39.7	102(17.3%)
14	瑞陵	"	34.4	30( 7.3%)
15	名古屋西	"	33.0	
16	横須賀	愛知	(30.0)	
17~19	豊橋東	"	(28.6)	
"	名古屋	"	(28.6)	
"	名大付属	"	(28.6)	
20	岡崎	"	27.3	
21	滝実業	愛知	(22.2)	
22	一宮	"	19.0	
23	菊里	"	14.3	
24	桜台	"	8.3	

\* 本学学生部の調べによる

( )付はサンプル数10以下のものを示す

\*\* 39年3月卒業生数に対する、浪人を含む合格者の割合(%)

比の値でなされるべきで、絶対数でなすべきではない。目下のところ、手許にはそのような資料がないので、いま、ここでは、本学への受験者数に対する合格者数の割合によって、各高等学校の比較をしてみよう。

既に、表7や表8に示したように、どの学校からも、評価の平均が3以下であるような生徒は、極めて少数しか受験していないのであるし、また、図5で明らかのように、高等学校での成績が、評価平均4.8以上という生徒でも、63~4%しか合格していないのであるから、このような代用は十分意味があるわけである。表9は、この検討に用いた784のサンプルのなかに、当の学校の出身者が7名以上含まれていた高等学校だけについて算出したものである。

この結果によると、学生部の調べによる合格者の絶対数の多い上位10校の間でも、合格率(サンプルによる)の順位はかなり異なるのであって、岐阜と東海の両校の間には、5%の危険率で、全数についても合格率の差があると判断できる。

このような合格率によって高等学校の差をみていくことは、何等かの意味での格差に迫るものであるとはいっても、それを入学試験の改善に直接役立てることは難しい。合格率が高いということのなかには、受験指導が徹底しているという要素も含まれていよう。学校によっては、成績上位の者がほとんど受験していないのもあるし、また、成績のかなり劣った者まで受験しているのもある。学校の格差を手掛りにしては、結局、本筋をいくことにはならないであろう。大学としては、受験者が1名しかいなくても、とびきり優秀な生徒を入学させたいわけである。

## 2. 学校差と受験者構成

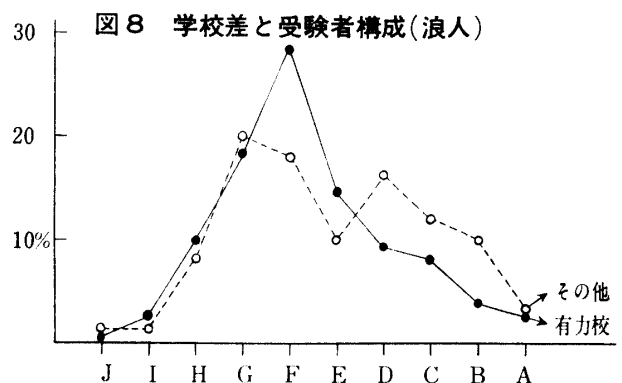
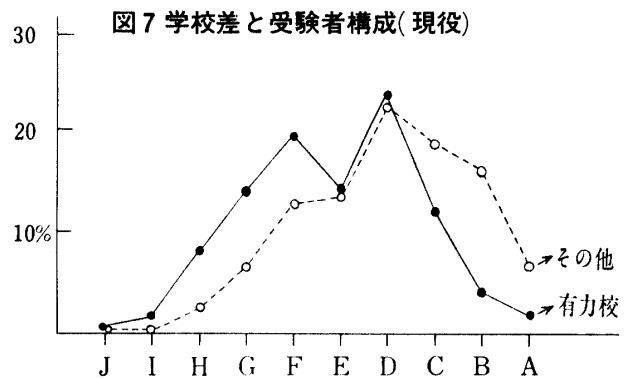
表9に掲げた学校のうち、本学に30名以上の合格者を出しているものは、世間でいわゆる「有名校」である。ここでは、これを有力校と称して、上の格をもつ高等学校として扱っていきこう。表9でその他の学校は、使用したサンプルのなかで、7名以上の受験者を出しているものであるから、これら以外の学校とは一応区別して、中の格の高等学校として扱うこともできるだろう。一二の資料ではそのように取扱ってみることとする。

しかし、サンプルのなかでは、有名校からの受験者が50.0%を占めているのであって、「その他」の50.0%のうち、中の格のものが21.4%、それ以外が28.6%である。そこで、原則としては、高等学校を「有力校」と「その他」とに二分して扱っていく。

さて、この二つに大別した「学校差」によって、高等

学校在学中の学業成績(最終学年における全教科の評価平均)別の受験者構成をみると、現役と浪人とに分けて図7および図8のようである。既に、図5にも示したように、浪人受験者では、在学中の成績が中以下の者が増加する点では、学校差は無いといってもいいが、しかし、「有力校」では、浪人であると否にかかわらず、成績上位の者の割合が「その他」よりも少ない。ここに本学のような大学の特色があるのではないかと考えられる。しかも、成績上位者が少ないのは、特に現役受験者の場合に顕著であって、その点「その他」の高等学校の場合と反対の傾向を示している。

それは、あたかも、有力校の上位者はより上の格の大学を志望し、失敗すると本学程度に志望を下げてくるのに対し、その他の高校の上位者は、本学で失敗すると、より下の格の大学に志望を変えていくという説明があてはまりそうな傾向である。



もし、このような説明が若干でもあてはまるとするならば、二つの高校の生徒の間には、既に受験時の意欲において、あるいは、気力において差異があるということになる。その上、巷間伝えられるような学力、その他においても、学校間に差があるとすれば、高等学校における成績を入試に重視することは、相当問題がありそうに思われる。

しかし、それは、既に前節でも述べたように、実状に合わせて在学中の成績の取扱いを考えていくというのではなく、成績を重視するという取扱いを公に打ち出すことによって、実状を変革していくことの方が教育的にみて本当である。そればかりではなく、国立教育研究所の追跡研究でも明らかのように、入学後の成績との関係からみれば、出身高校の「格」よりも、高校内での相対的地位の方が将来の伸びに効果があるのであるから、一層在学中の成績を重視することが必要になってくるといわなければならない。

### 3. 学校差と合格率

それにしても、入学後のことについては、本学では、まだ、資料の集積を行っていないから、さし当って、入学試験の学力検査にはどのように学校差が効いているかを検討してみるしかない。いわゆる有力校では、生徒の質がよいとしても、その上になお、受験のための強力な指導も行なわれているのであって、それは、学力検査に反映しないわけではないであろう。それは、どの程度の生徒たちにとって、どの程度の差として出てくるものであろうか、というのが、さし当っての目標である。

まず、学校差を「有力校」と「中間校」と「その他」とに分け、在学中の成績段階別に合格率を見たのが、図9である。この図ではサンプル数が少ないので、成績段階を二つずつ合せつ5段階とした。この結果によれば、どの程度の学校についても、成績段階の上の者ほど合格

率が高くなっているが、「中間校」においては、その率がほぼ直線的に上昇していくのに対し「有力校」では、中の上までは「中間校」よりも明らかに合格率が高いが、上の段階になると中間校との間に差がなくなり、伸び悩みの状況となっている。この点に注目すれば、「有力校」は、生徒の質がいいということよりも、受験指導がよく行われていて、それが中位の段階の生徒に効いていると考えた方がいいように思われる。

「有力校」においても、「中間校」においても、学業成績「上」の生徒ですら合格率がたかだか60%程度に止まっていることは、それが学業成績と学力検査という同種のものとの関係である点からみて、40%程度の誤差が学力検査の側にあるとみるべきである。一教科2時間の1回の検査と、3ケ年間の長期にわたる業績の評価とでは後者の方こそより信頼すべき資料であるからである。

「その他」のなかには、種々さまざまな高等学校が含まれているが、合格率の上昇が緩く、「上」の段階の合格率が中間校と一段、有力校と二段隔っていることは、生徒の質も、教師の指導その他も、入試の学力検査には不適當であることを意味していると考えられる。

次に、サンプル数の関係から、中間校をその他のなかに入れ、「有力校」と「その他」の2群とし、現役と浪人とではどうなっているかを調べてみると図10のようになる。昨年度の学力検査について、5教科3ケ年間の評価平均との関係を同様に整理したものを比較のために示すと図11のようである。

すなわち、浪人は、一般に現役よりも合格率が高く、「有力校」は一般に「その他」よりも合格率が高い。そ

図9 学校差と合格率

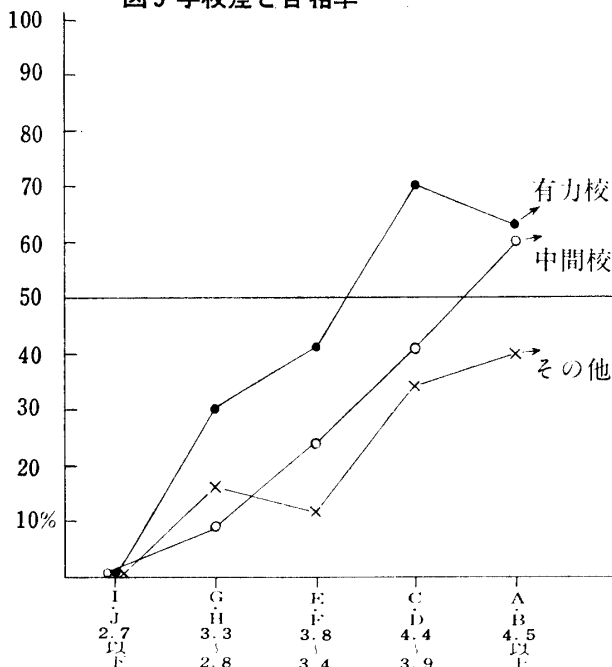


図10 学校差、浪人、現役別合格率 (本年度)

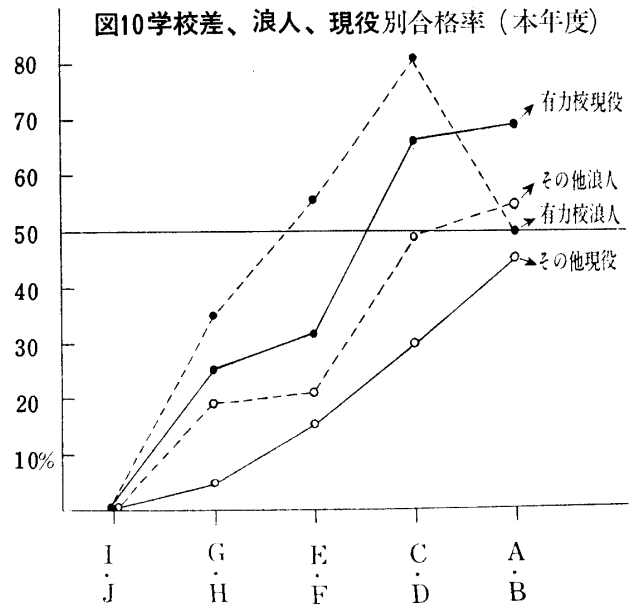
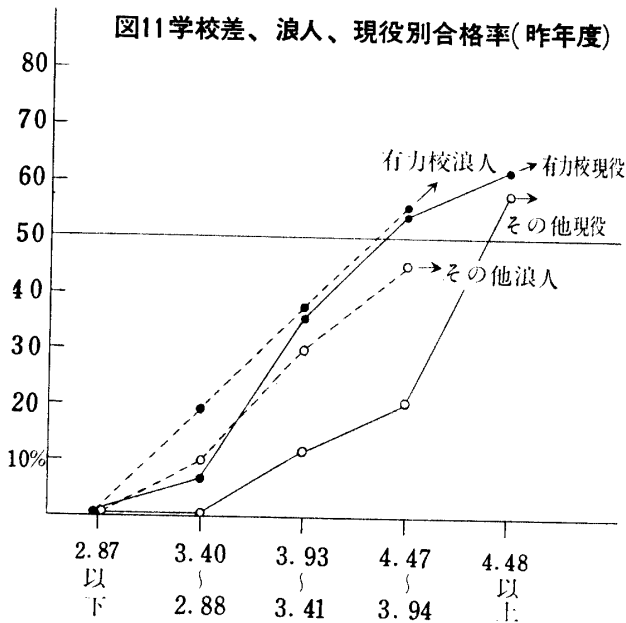


図11 学校差、浪人、現役別合格率(昨年度)



して、どちらかという、浪人の合格率の伸びは「その他」の方がいいように見える。しかし、注目すべきことは、サンプル数が少ないということも念頭におかなければならないが、成績段階A、Bあるいは評価平均4.48以上の者においては、現役と浪人との差も、「有力校」と「その他」との差も少なく、統計的に有意差ありと認められるものがほとんどないという点である。昨年度と今年度とでは、一方が、5教科だけの3ヶ年間の評価平均で段階を作り、他方は最終学年の全教科、科目の評価平均で段階を作ったという違いはあるにしても、この両者の間の相関は極めて高いのであるから、両年度の結果の相違は、主として、入試の学力検査の差によるものと考えるのが妥当であろう。それにしても、上述のように「上」の段階では、学校差が無くなるか、または、小さくなる傾向は認められるのであって、このことは、学力検査に表われる「学校差」が主として、「中」の段階の者たちに関してであるということになる。

そればかりでなく、1回限りの学力検査がもつ、種々の誤差を考えれば、このことは、高等学校における学業成績その他について、少なくとも「上」の段階の者に関しては、学校差を過大視する必要はないことを意味しているといわなければならない。このことを足場として考えていけば、各種の誤差の含まれている学力検査を中心に入学者を選抜するよりも、高等学校における学業成績を中心にし、学力検査は補助的資料として用いることの方が妥当であるといえよう。その重視、軽視の比率を比喻的に数で表わせば、

現状が 学力検査10、 高校での成績0  
であるのに対し、

むしろ、学力検査2、 高校での成績8

あるいは、少なくとも、学力検査4、高校での成績6程度

に取扱うことが、過誤を現在よりも少なくすることとなる。副次的効果としては、このような取扱いが滲透することによって、いわゆる学校差も小さくなっていくであろうし、入試のための無益な勉強のために、高校生の生活が歪むこともなくなっていくであろう。

#### 4. 学校差と学力検査成績

合格率によって比較すれば、前節で述べたような学校差が認められるが、学力検査の一つ一つの検査成績によって比較すれば、表10に示したようになる。総点においては、現役で学校差が認められるが、浪人では認められない。既にみてきたように、合格率などにおける差を合せて考えれば、平均点における差は、高等学校における成績の中位の者たちの間での差が効いているのだといえる。

各教科、科目についてみれば、有意差の認められるのは、外国語、国語、数学においてであって、理科、社会科学における各科目については、概して差がないといえてよい。また、外国語では、浪人における学校差が少なくなっているのに対して、数学では大きくなっていることは、後にみるように、「浪人効果」が両教科では異なるのではないかと考えられる。

また、外国語については、「その他」の高等学校出身者において、浪人の方が有意に高い成績であることも注目しておきたい。

さて、そこで、このような学力検査の成績と高等学校在学中の成績との間の相関関係というものからみて、学校差はあるのであろうか。合格率からみれば「有力校」でない方が、在学中の成績との対応がいいようにみえた。既に述べたA~Jの10段階に分けた在学中の成績と学力検査との相関係数を算出すると表11のようになる。

これによると、現役では、むしろ「有力校」の方が、高校成績と学力検査との相関が高いような傾向がある。それとは反対に、浪人では、「有力校」の方が相関が低い傾向がみとめられる。また、「その他」についてもいえることであるが、「有力校」においては、とくに、学力検査の各教科の成績は、現役については高校成績との相関が高いのに、浪人については、相関の低くなるものが多い。外国語、数学、物理、生物、日本史、世界史、人文地理についてそれが認められる。これらの教科、科目について、浪人における相関が低くなることは、1年またはそれ以上の受験勉強によって、いわば、一時的に付け加えられた「学力」の故であろうと考えられる。

大学入学試験に関する検討

表10 学校差と学力検査成績——（ ）内は標本数，\*印は5%有意

検 査	現 役			浪 人			有力校	その他
	A有力校	Bその他	A-B	a有力校	bその他	a-b		
総 点	479.5 (259)	441.5 (223)	+38.0*	500.2 (119)	494.7 (152)	+5.5	-20.7	-53.2*
外 国 語 数 学	68.0 (259)	58.3 (223)	+9.7*	72.2 (119)	64.8 (152)	+7.4*	-4.2	-6.5*
	97.7 (259)	92.3 (223)	+5.4*	101.1 (119)	94.1 (152)	+7.0*	-3.4	-1.8
	84.0 (259)	76.1 (223)	+7.9*	86.6 (119)	73.2 (152)	+13.4*	-2.6	+2.9
物 理 化 学 生 物	47.9 (166)	41.9 (143)	+6.0*	47.8 (69)	48.1 (99)	-0.3	+0.1	-6.2
	57.8 (246)	52.1 (214)	+5.7*	57.2 (115)	55.4 (145)	+1.8	+0.6	-3.3
	50.8 (96)	48.0 (86)	+2.8	51.2 (52)	46.1 (57)	+5.1	-0.4	+1.9
社 会 日 本 史 世 界 史 人 文 地 理	77.4 (35)	71.6 (38)	+5.8	77.0 (16)	72.9 (29)	+4.1	+0.4	-1.3
	68.0 (218)	64.9 (170)	+3.1	69.5 (100)	66.0 (110)	+3.5	-1.5	-1.1
	55.2 (188)	53.6 (169)	+1.6	58.7 (95)	56.2 (105)	+2.5	-3.5	-2.6
	54.4 (82)	58.1 (69)	-3.7	62.7 (27)	57.7 (60)	+5.0	-8.3	+0.4

表11 高校成績と学力検査成績の相関係数

検 査	現 役		浪 人	
	有力校	その他	有力校	その他
外 国 語 数 学	.383	.461	.189**	.321
	.365	.297	.317	.353
	.285*	.265*	.199**	.204**
物 理 化 学 生 物	.426	.292*	.072***	.019***
	.364	.336	.350	.268*
	.258*	.333*	.333**	.386*
社 会 日 本 史 世 界 史 人 文 地 理	.217***	.236***	.442***	.295***
	.427	.404	.231**	.277*
	.314	.440	.166***	.203**
	.533	.172***	.246***	.174***
総 点	.530	.520	.367	.343

\*は0.1%，\*\*は1%，\*\*\*は5%のレベルでそれぞれ有意ではないことを示す。

この受験勉強によって一時的に付け加えられた「学力」が真に大学入学後の学習に効果をもつのかどうか。

あるいは、高校における成績の方が入学後にものをいってくるのかどうか。問題は一応、既に入学者についてその後の状況を追跡してみるといところへいかざるをえない。

#### IV 入学試験における浪人効果について

##### 1. 浪人の抽出

前章においても、すべての面について、単に学校差ばかりでなく、現役と浪人とを対比的に取扱ってきた。そして、現役群と浪人群とでは、さまざまな面で相違があることが知られた。しかし、この現役と浪人とを比較することによって、一ケ年の受験勉強をすれば、しかしかの変化があるとはいえない。浪人とは、現役のうち、前年不合格となった者のことである。したがって、現役のなかには、浪人にならない者が多数含まれているのである。したがって、厳密には、浪人をした者が、現役時代と比べてどうなったかを比較するのになければならない。本年の検討では、とくにこの点に力点を置いた。

さて、浪人は、すべて前年における「検査成績」をもっているのだろうか。まず、今回のサンプル830のなかに、浪人は299名いた。すなわち、全体の36%である。しかし、この299名はすべて前年本学を受験しているのだろうか。前年度の志願者名票に当たってみた結果、



前年度も本学を志願した者であることが確められた者は、そのうち181名、浪人中の60.5%である。なお、そのうちで、前年度、今年度ともに完全に受験している者は169名であった。つまり、本年度志願者中の浪人のうち、約40%は、前年度には本学を受験していないのである。これらの者が、どのような経路をたどって、本年本学を受験するに至ったかは明らかでないが、このことは当然、本年度、現役で不合格になった者、すなわち、現役受験者の63%、全受験者の40.4%と、浪人で不合格になった者、すなわち、浪人受験者の59%、全受験者の21.2%とが、明年度の浪人受験者になるとはいえない。

さて、そのような、本学を少なくとも連続2回受験している者の志望はどの程度一貫しているのであろうか。181名の受験学部を整理してみると、表12のようになっている。すなわち、前年度受験した学部を今年度も受験している者は117名(64.6%)であって、他の者は受験学部を変更している。そのうち、文科系学部志望から理科系学部へ、あるいはその逆へと変更した者は、理科系文科系ともに約17%ある。

このように、志望(受験)の系統を変更した者の、本年度の合格率は、文科系から理科系へ変更した者では63.6%、理科系から文科系へ変更した者では20.0%であって、その間には有意な差がある。しかし、この学部変更の傾向や、その合格率の差の意味などについての解釈は、目下のところ困難である。ほとんど、あらゆる場合が起っていると行った方がいいのであって、受験者が「何を考えて」志望学部を決定するのか、自己について

どのように考えて行動しているのかについては、かなり問題として追究すべきものがあるように思われる。しかも、最初の学部を再び受験している者も、そうでない者も、合格率からみれば、それぞれ50.4%、48.4%であって、全然差はないのである。

この181名のうち、浪人した期間別に分けると、

1年浪人	145名	} 36名(19.9%)
2年浪人	28名	
3年浪人	4名	
4年浪人	2名	
5年浪人	1名	
14年浪人	1名	

であるほか、1年浪人のなかには、前年某学部合格しながら、本年他の学部を受験し直している者が1名含まれている。2年浪人以上の者が、一昨年またはそれ以前にも本学を受験したかどうかは不明である。

## 2. 両年度の学力検査成績の比較

前記のように、得られた標本数が少ないので、1年浪人も2年以上の浪人も合せて取扱うこととした。そこでまず問題になるのは、これらの浪人全体として、前年度に比べ、どの程度学力検査成績が上昇しているかということである。

その学力検査の比較においては、素点のままで比較することはできない。例えば、前年度の外国語の平均は

表13 両年度の各教科、科目別平均成績

教科 科目	38年 度		39年 度		両年度の 平均の差
	平 均	標準偏差	平 均	標準偏差	
外国語	95.98		106.33		10.35*
国語	95.57	17.29	104.09	18.13	8.52*
数 学	93.08	16.32	104.09	17.21	11.01*
		15.20		19.50	
物 理	48.42		52.30		3.88*
化 学	49.15	10.68	52.46	9.92	3.31*
		9.12		9.88	
生 物	50.37	9.69	52.21	8.83	1.84
日 本 史	50.46		52.00		1.54
世 界 史	48.54	8.58	52.58	9.76	4.04*
人 文 地 理	48.11	8.43	52.24	7.94	4.13*
		10.86		7.59	
総 点	481.18		524.32		43.14*
		46.59		55.71	

\* 5%水準で有意

表12 両年度の受験学部

38年度	農 工 医 理				経 法 教 文				計
	農	工	医	理	経	法	教	文	
39年度									
文					4	4	4	12	24
教	1	1	1		(2)	(1)	(3)	(4)	(10)
法			(1)				2		5
経		4	1				(1)		(2)
		(4)			2	6			13
			2	1	(1)	(1)			(6)
			(1)	(1)	13	1	1	4	22
					(8)		(1)	(2)	(13)
理		2		9	2	1		1	15
医		(2)		(7)	(1)	(1)			(11)
			25		1	2		1	29
			(12)					(1)	(13)
工	4	46	1	2	3	1	4	2	63
農	(3)	(25)	(1)	(2)			(1)		(32)
	4	2	1	1	1		1		10
	(1)	(2)							(3)
計	9	55	31	13	26	15	12	20	181
	(4)	(33)	(15)	(10)	(12)	(3)	(6)	(7)	(90)

( )内は39年度に合格した者(内数)

大学入学試験に関する検討

97.4であったが、今年度のそれは、表1に示したように64.0である。この二つを比較して、今年度は外国語の成績が33点余り低下したとはいえない。そこで、以下の「浪人効果」の検討については、前年度、今年度とも、表2、表3に示したような、標準点に換算して行なった。こうすることによって、前年度の外国語97点は100点であり、今年度の外国語64点も100点であるということになる。このようにして、各教科の平均点を比較すると表13のようになる。

この表で明らかのように、前年度はどの科目でも、全受験者の平均より少々下ぐらいであったものが、今年度ではすべての科目で、平均より上（外国語、国語、数学で100以上、その他の科目で50以上）になっている。そうして、両年度の成績の間には、生物と日本史の二つを除き、5%以下の危険率で有意な差があるのである。

このように浪人全体の学力検査成績は、平均としては上昇しているのであって、この限りでは、1ケ年間に浪人しての受験勉強が若干の効果があるといえる。しかし、個々人についてみると、すべてが上昇しているのではなくて、なかには前年度よりも成績の落ちている者もある。そこで、両年度の成績の差を個々人について求め、その差の平均をとってみると、差の標準偏差が、科目によって異なるのである。結果は表14に示した。

表14 両年度検査成績（標準点）の差の平均

教科	平均	標準偏差	人数	科目	平均	標準偏差	人数
外国語	+10.4	14.9	169	日本史	+1.5	7.9	130
国語	+8.5	18.2	169	世界史	+4.0	7.6	131
社会科	+6.3	13.4	169	人文地理	+4.1	10.2	46
理科	+6.7	14.5	169	物理	+3.9	10.4	108
数学	+11.0	19.3	169	化学	+3.5	9.3	158
				生物	+1.5	8.6	58

+は今年度成績が前年度成績よりも上昇していることを示す。

この結果で明らかのように、浪人1年間の間に、成績が上昇したといっても、標準偏差はかなり大きく、下降した者も少なくない。いま、教科では10点段階、科目では5点段階に区切り、両年度の成績段階が上った者、下った者、不変の者の割合を示すと表15のようになる。これで明らかのように、どの教科、科目についても、40%から60%位の者の成績は上昇しており、12~13%から30%位の者の成績は下降しているのである。

さて、このように、一部の者は浪人することによ

て、学力検査の成績が下るのであるから、両年度の検査成績の相関係数は余り高くはないだろうと考えられる。その相関係数は、表16に示したように、標本の少ない人文地理と生物とを除き、全体については、すべて0.1%の水準で有意な相関があるが、しかし、必しも十分に高い値であるとはいえない。「有力校」と「その他」とに分けてみても、統一的に解釈のできるような傾向は認められない。

「浪人効果」とは別の観点であるが、この両年度の相関係数は、同一教科、科目の検査を、1年の間隔で2度

表15 検査成績変動の状況

教科	上昇	不変	下降	科目	上昇	不変	下降
外国語	62.1%	25.4%	12.4%	日本史	41.5	27.7	30.8
国語	56.8	18.9	24.3	世界史	56.5	20.6	22.9
社会科	54.4	22.5	23.1	人文地理	56.5	19.6	23.9
理科	52.7	28.4	18.9	物理	51.9	18.5	29.6
数学	63.9	16.0	20.1	化学	53.8	18.4	27.8
				生物	46.6	17.2	36.2

表16 両年度検査成績の相関

教科	全体	有力校	その他	科目	全体	有力校	その他
外国語	.665	.750	.580	日本史	.566	.488	.627
国語	.410	.372	.431	世界史	.577	.602	.528
社会科	.586	.534	.587	人文地理	.430 <sup>x</sup>	.427 <sup>xxx</sup>	.397 <sup>xx</sup>
理科	.622	.628	.634	物理	.493	.546	.453
数学	.402	.330 <sup>x</sup>	.460	化学	.522	.487	.576
総点	.755	—	—	生物	.431 <sup>x</sup>	.309 <sup>xxx</sup>	.580 <sup>x</sup>

<sup>x</sup>は0.1%、<sup>xx</sup>は1%、<sup>xxx</sup>は5%の水準で有意でないことを示す。

受験した者たちの成績の関連性を示すものであるから、いわば、一種の信頼性または妥当性の指標とも見られるわけである。毎年度の、外国語なら外国語の検査が、等しく「高等学校卒業程度の学力」を測っているものであるとすれば、両年度の検査を同一人からなる受験者群に実施した場合、その相関係数は、当然、相当高いことが要請されるわけである。しかるに、実際は、「総点」を除き、0.7以上の係数のものは一つもない。これは1年という間隔の影響でもあろうが、しかし、国語や数学のごとき教科の相関係数は、このような見地からすれば、到底、同一の学力を検査するものであるとはいえないのであって、毎年度、測定するものが、かなり変わっているといわなければならない。

次に、それにしても、すべての教科の成績の合計である「総点」では両年度の相関係数が0.75を起しているところは注目する必要がある。個々の教科の検査では不十分であっても、合計した成績には一貫した傾向が認められるということは、後に触れるように、別の総合の方法があるにせよ、単純に合計したもので、何か「学力一般」を表しているのだと考えられないことはない。先に、表6でみたように、教科、科目間の相関係数がすべて正であり、しかも5%水準で有意であるということから考えて、各教科、科目の検査を下位検査とする「一般学力」の検査として、何等かの意味で「総点」を生かすことが考えられてもいいように思われる。

しかしながら、「総点」においても、なお、前年度よりも下降している者が12.4%いるのである。「総点」すなわち「学力一般」としても、浪人中にすべての者が上昇する、あるいは下降しないとはいえないのである。このような者たちの特徴として、何かあるのではないかと考えられるが、サンプル数が少ないとはいえ、浪人年数、学校別、高校成績別などの諸点などからみて、何等の傾向をも見出すことはできない。現在の段階では、これらを、受験者個々人の特性に由来するものと考えたよりも学力検査に由来する誤差と考える方がより妥当のように思われる。それは、標準点の合計（ここでいう総点）において、100点以上上昇した者は11名あり、最高は、136点の上昇を示しているのに対し、30点以上の下降を示した者は4名で、そのうち3名が30点台であって、最高は72点の下降を示した1名にすぎないところからも推論されるのである。

### 3. 「浪人効果」と高等学校成績との関係

ここで「浪人効果」というのは、同じ検査を繰返し受験することによって成績の上昇をもたらすような「練習

効果」と同じ意味で、大学入試の学力検査を毎年受験する際に期待されるところの、1ケ年間の受験勉強の成果としての学力検査成績の上昇（ここでは、年度間の比較を可能ならしめるために、検査成績は標準点によって表わされるが）をいうのである。

その意味での「浪人効果」は、学力検査の総点について最も顕著に表われることは既に述べた通りである。各教科、科目別にみると、必しもすべてのものに「浪人効果」がいちじるしいとはいえない。表14~16を通して見れば、平均的に得点が上昇していても、受験者（浪人）のなかに成績の下降した者が多いものがあったり、あるいは、平均点の上昇の多少と、両年度の成績の相関とが対応していないもののあることがわかる。これらのすべてを通して、「浪人効果」が最も明瞭に出ているのは、「外国語」であるといえよう。

さて、そこで、このような「浪人効果」を規定するものとして、どのようなものが考えられるかを吟味して見る必要がある。まず、図10や図11でみたように、「浪人効果」には、学校差も高等学校在学中の成績も関係しているように思われる。以下では、この二つの観点から、整理してみよう。

その場合、サンプル数が少ないので、総点の成績の差の平均と高等学校在学中の成績との関係を、表17のようにあらくしてみた。

この結果によると、大体において、平均的にみた「浪人効果」は、高校成績の高い者ほど著しい。そして、高

表17 両年度の総点の差と高校成績

段 階	評 価 平 均	標 本 数	総点の差の平均
A・B	4.5 ~ 5.0	19	+ 42.63
C・D	3.9 ~ 4.4	44	+ 48.86
E・F	3.4 ~ 3.8	62	+ 37.41
G~J	3.3 以 下	43	+ 26.04

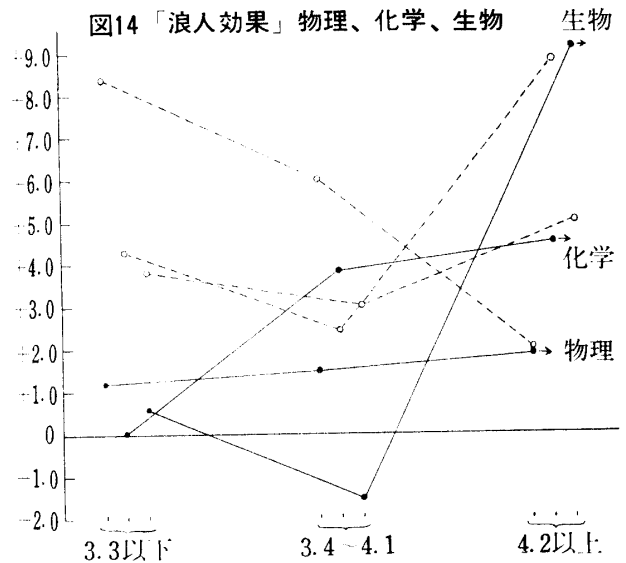
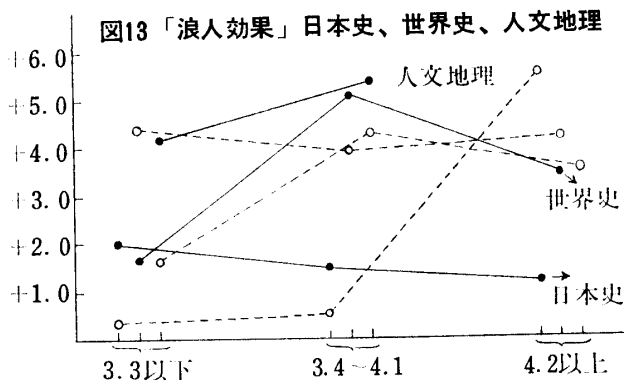
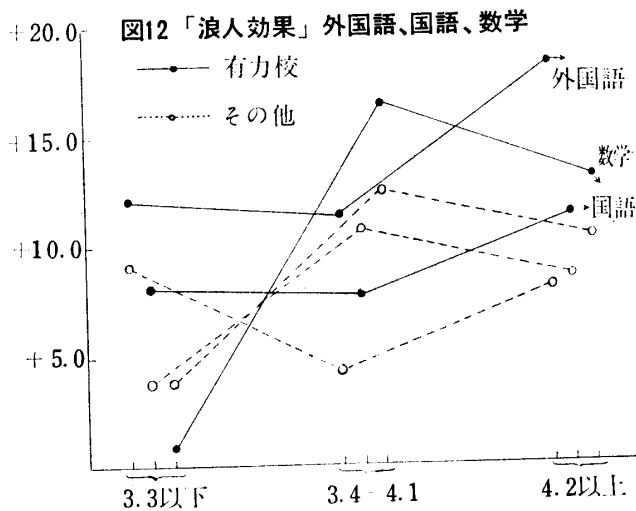
+は今年度の総点の方が高いことを示す。

表18 両年度の総点の差と学校差、高校成績

段階	評価平均	有 力 校		そ の 他	
		標本数	総点差	標本数	総点差
A~C	4.2~5.0	13	+50.0	23	+45.7
D~F	3.4~4.1	50	+41.2	39	+37.9
G~J	3.3 以下	22	+22.3	21	+30.0
全 体		85	+37.6	83	+38.1

校時代の成績が3.9以上の者から上は、大体同程度であるように見える。さらに、総点について、高校成績と学校差との関係を見ると表18のようになる。この場合にはサンプル数の関係から、成績段階をさらにあらくせざるをえなかった。この結果からみれば、学校差は余り顕著でなく、わずかに、高校成績3.3以下の者について、「その他」の方の上昇が大きいようにみえる程度である。そして、成績段階については、学校差にかかわらず、成績のいい者ほど「浪人効果」が大きいことを示している。「浪人効果」と高校成績との相関係数は、余り高くなく、+0.178であって、5%水準で有意である。

この点からみれば、第一報告において推論したように、大学受験のために浪人しても、おおよその傾向としては、高校時代の成績がある程度以上でなければ、合格圏内に入る見込みは少ないといわざるをえない。逆にいえば、このようなところからも、高等学校在学中の成績を中心に、大学の行なう学力検査を補助として、入学者の選抜を行なうべきであるということがいえよう。



総点については上述のようであるが、同様に、各教科、科目の検査成績について認められる「浪人効果」を一通り眺めておこう。便宜のために図12～図14のように示す。これらの結果をみると、サンプル数の僅少であるためであろうが、「浪人効果」と各教科、科目との特徴的な関係を導き出すことは困難のように思われる。これらが総合されることによって、「総点」としては、先に述べたような、高校成績との関係が出てくるところに、今後の問題が潜んでいるようである。

ここで用いた高等学校在学中の成績は、既に述べたように、全教科、科目の評価平均であるから、そのために、同様な性質の「総点」との間に一定の関係が認められるのかもしれない。だとすれば、学力検査の教科、科目に対応する高校成績をもってくれば、それぞれの教科においても、同様の関係が成立するかもしれない。この点は次の課題である。

#### 4. 「浪人効果」と個人的特性など

集団的にみれば、浪人は浪人をしただけのことはあり、そのような効果が認められたが、その効果の多少が何に関係しているのかについては、以上のような程度のことしか判らない。現在としては、手許の資料の関係もあって、これ以上細々した点までを追求することはできないのであるけれども、なお、現状において、「浪人効果」の顕著な個人の特徴を探ってみることは、今後のために必要であろう。

そこで、総点において「浪人効果」の顕著な者、すなわち、「浪人効果」の平均よりも、+0.5σ以上の者およ

表19 「浪人効果」の高い者

総点での「効果」 外国語での「効果」	+55以下	+56~75	+76以上
+25以上	G <sub>13</sub> 10名	G <sub>12</sub> 6名	G <sub>11</sub> 11名
+18~24	G <sub>23</sub> 11	G <sub>22</sub> 3	G <sub>21</sub> 3
+17以下	86	G <sub>32</sub> 24	G <sub>31</sub> 15

び+1.0σ以上の者、また、外国語において、同様の者を選び出し、それらの者にどのような特徴が認められるかを調べてみた。それらの条件をみだす者は、表19のようであった。

この表のG<sub>11</sub>からG<sub>32</sub>までの各群に属する各個人につき、その浪人経験年数、出身高校別、高校成績別、志望学部別等を一々検討してみたが、何等の共通特性らしいものは見出せなかった。もし、個々人について、「浪人効果」が顕著に現われる条件を見出そうとすれば、学習態度、知的素質その他を含めたパーソナリティー全体を捉えなければならぬ。そのようなことは、入学試験の方法としての観点からは、実際的でないから、ここでこの方向へ進むことは適当ではない。

さて、そこで、いままで注目しなかった他の点に目を向けてみると、この個人的特性に加えるべきものとして、前年度の学力検査成績があった。いま、サンプル数が少ないので、前年度学力検査成績の総点の平均（ここで用いた浪人群における平均である）から、+0.5σ以上の者と-0.5σ以下の者とをチェックしてみると、次のようになっていることが判った。

1) 総点での「効果」の程度について

G<sub>11</sub>~G<sub>31</sub>では G<sub>12</sub>~G<sub>32</sub>では

前年度学力総点上の者	7名	4名
〃 〃 中間の者	15	15
〃 〃 下の者	7	10

であり、他方

2) 外国語での「効果」の程度について

G<sub>11</sub>~G<sub>13</sub>では G<sub>21</sub>~G<sub>23</sub>では

前年度学力総点上の者	8名	5名
〃 中間の者	16	7
〃 下の者	3	5

であって、そこに若干の傾向を認めることができる。

そこで、いま、総点での「効果」と外国語での「効果」を同時に考え

- A) G<sub>11</sub>の者
- B) G<sub>12</sub>およびG<sub>21</sub>の者
- C) G<sub>13</sub>, G<sub>22</sub>, G<sub>31</sub>の者
- D) G<sub>23</sub>およびG<sub>32</sub>の者

の4つに分けて、前年度の学力検査総点がどうであったかをみると、次のようである。

	A)	B)	C)	D)
前年度学力総点上の者	5名	2	3	7
〃 中間の者	6	6	15	16
〃 下の者	0	1	10	12

この結果からすれば、今年度の学力検査において、「浪人効果」が顕著に表われるかどうかは、前年度の学力検査において、その成績がどうであったかが関係しているように思われる。この点についての吟味は、さらに多くのサンプルによって試みしてみる価値がある。

仮りに、前年度の学力検査成績がある程度以上でなければ、多大の「浪人効果」が認められないとすれば、高校在学中の成績と前年度の入試学力検査成績とから、浪人の可否について適切な指導または自己判断が可能となるであろう。また、別の考え方をすれば、ある水準以上の者に「浪人効果」が大きいということは、1回の学力検査では測定しあやまっている程度が大きいことを意味するのであって、学力検査による合否判定そのものが、この誤差を十分に考えた、おおまかな段階分けで行われるべきであることをも意味し、学力検査を合否を判定する、唯一、最大の手掛りにしておいてはいけないことをも意味している。

## V 要約と補足

本年度の本学入学試験結果について若干の検討を試みた結果の要約と若干の補足を行えば、次のようにいうことができるであろう。

(1) 学力検査の結果は、第一報告で述べたような昭和36年度や昭和38年度の学力検査の結果と異なっている。毎年受験者の学力の水準や質が全体としては大巾に変動するとは考えられないから、学力検査問題が、それぞれの教科、科目に関して、「高等学校卒業程度の学力」を推定するという目的に関して、毎年度かなりの誤差を包含しているといわなければならない。

(2) 社会科および理科のように、それぞれの教科の学力検査において、4科目中から任意の2科目を選択受験させる場合には、4つの科目の難易がその教科の成績に影響する。科目選択の状況は、すべての可能な選択組合

## 大学入学試験に関する検討

せが生じているから、選択による利、不利は最大限に起っているわけである。この調整のためには、標準点 ( $T_1$ ) への換算が絶対に必要である。同様のことは、5つの教科間の重味を均等にするためにも必要であって、これらのことは前報告と全く同様の結論となる。表2または表3によって、同一の素点が、教科や科目が異なり、その平均や標準偏差が異なることによって、いかにかけ離れた標準点となるかを見れば、必要な理由は詳しく述べるまでもない。

(3) 学力検査の各教科、科目の成績が、実際の「合格・不合格」とどういう関係になっているかをみると、どの教科においても、かなり低い成績の者も合格している。どの教科、科目にしても、ある程度以下の成績の者は、仮りに他の教科が優れていても、5教科を対等に取扱うという建前からすれば、合格させるべきでないと考えられる。各教科について最低の許容限界を定めるべきである。それは、いかに限界を広くしても、標準点  $T_1$  において24以下、 $T_2$  において49以下にまで下げるべきではあるまい。

また、合格と不合格との両群における各教科、科目の成績の間の相関、すなわち、点双列相関係数を計算してみると、次のようである。

外国語+0.453	日本史+0.376	物理+0.535
国語+0.452	世界史+0.450	化学+0.617
数学+0.531	人文地理+0.307	生物+0.461

これからみれば、各教科、科目成績と合・否の間には、大して高い相関があるとはいえない。このような結果が出てくるのは、単純な素点の合計によって合・否が決定されていくことにもよるものである。

(4) 社会科および理科において、どのような科目を選択して受験するかということと、外国語、国語、数学においてどのような成績をとるかということとの間には、一定の関係傾向がある。すなわち、化学、生物、世界史を選択した者の、外国語、国語の成績は平均的に高く、物理、化学を選択した者の数学の成績は平均的に高い。これは、他方では志望学部との関係がありそうであるが、それにしても、学部ごとに科目を指定する場合には、この傾向は重視する必要があるだろう。

(5) 学力検査の各教科、科目の成績の相互間の相関係数を算出してみると、教科、科目の間には、特殊な結びつきのあるものがあることがわかった。この点に注目すれば、学力検査の科目を省略して、少数の科目にしぼることも可能であろう。先に述べた例以外に、最も科目数を少くすれば、

外国語、世界史、化学

の3科目にしても、大体、現在と同様の効果をあげることができよう。このことは、先に示した合・否と各教科科目との相関係数の大小からみても、おおよそ支持されよう。

また、しかし、全教科、科目の間の相関は有意であるから、「一般学力」を算出することも意味があるといえる。しかし、その場合、各教科、科目の測定している「学力」の次元は、ある角度をもって交差しているのであるから、「一般学力」(A)は単純和の形ではなくて、

$$A = k \sqrt{a^2 + b^2 + \dots + n^2}$$

のような形で求めるべきであろう。ここにkは、各次元の交差の角度を示す常数である。実際問題としては、合・否の判定にはkは省略して考えることができるし、平方根を算出する必要もない。そこで「一般学力」を  $A'$  として

$$A' = a^2 + b^2 + \dots + n^2$$

の形で求めれば十分である。このことは、各教科の成績(標準点)の平方和を求めることである。こうすることによって、どの教科にも平均した成績を示す者よりも、二三の教科に特に優れている者が有利になる。そのことは、各学部での入学者判定にとっても有用であろう。表20に一例を示した。

この例は、大体合・否すれすれ辺りの者を抽出したものであるが、単純和では同点または1~2点の差であっても、平方和では順位がかわってくるものが示されている。そして、順位が上昇する者は、どれかの教科において優れた成績を示しているのである。例えば、J、N、Pなどはその好例である。ここには(3)で述べたようにある限度以下の成績をとった者はないが、この限界以下の成績の者を切ったあとは、このような「一般学力」の算出をするのが合理的である。その上で、先のJ、N、Pなどが志望学部に適わしいかどうかを吟味するのがいい。

(6) 調査書については、高等学校在学中の最終学年における全教科、科目の評価の平均を主として取扱ったが、これは、前年度と殆んど完全に一致した分布を示している。この点から考えると、毎年度、調査書の判定基準を作成する必要はないように思われる。学力検査に含まれる5教科の3ヶ年間の評価平均についても、ほぼ同様のことが考えられる。

調査書から得られるところの、高等学校在学中の成績に関する手掛りとしては、同年度の卒業生のなかでの、5段階区分による「概評」があるが、これに信憑性のないことは、第一報告で述べた通りである。この「概評」

表20 学力検査成績の単純和と平方和の比較

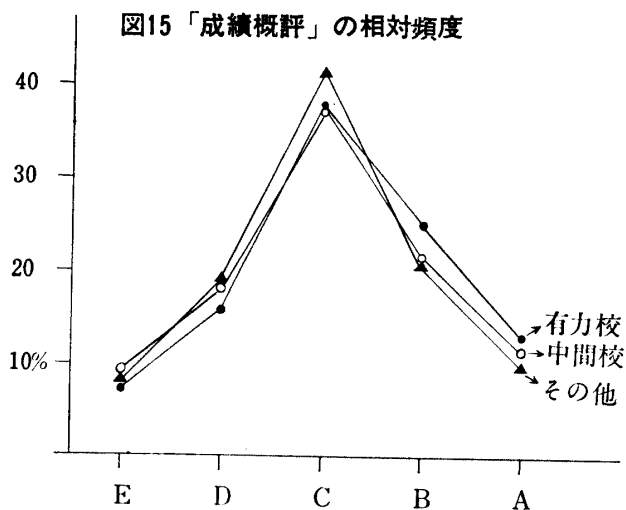
標 本 記 号	志 望 学 部	教 科 標 準 点					単 純 和	そ の 順 位	平 方 和	そ の 順 位
		外 国 語	国 語	社 会 科	理 科	数 学				
A	経 済 学	139	121	108	93	68	529	3	58899	1
B	工 学	90	113	108	114	114	"	3	58525	2
C	医 学	110	114	128	102	75	"	3	57509	3
D	工 学	105	114	103	116	91	"	3	56367	5
E	"	101	112	110	106	100	"	3	56081	8
F	工 学	113	104	105	94	112	528	6.5	55990	9
G	医 学	104	115	111	96	102	"	6.5	55982	10
H	法 学	120	91	116	104	95	526	8.5	55978	11
I	工 学	98	105	102	103	118	"	8.5	55566	12
J	"	107	76	123	99	119	524	10	56316	7
K	法 学	119	108	113	98	84	522	11.5	55254	15
L	工 学	101	98	105	104	114	"	11.5	54642	17
M	医 学	107	87	113	101	113	521	13	54754	16
N	経 済	103	86	95	91	145	520	14.5	56366	6
O	"	108	78	93	127	114	"	14.5	55522	14
P	医 学	74	89	89	128	139	519	16	57023	4
Q	工 学	92	78	96	129	123	518	17.5	55534	13
R	医 学	110	99	88	109	112	"	17.5	54074	18
S	工 学	100	117	109	94	97	517	19.5	53815	19
T	理 学	100	88	99	117	102	"	19.5	53693	20

は、仮りに信憑性があったにしても、実際に本学に受験する生徒においては、概評が E の段階であるというのは、皆無であるし、D の段階の者でも、僅々 1% 程度であって、要するに、合・否判定の対象となる者では、A, B, C の 3 段階しかないのである。これらのことを

考え、さらに、各高等学校における 5 段階区分が、図15 に示すように必しも同様でないことを考えると、同年度卒業生のなかでの相対的位置を明示する資料がほしくなってくる。その一方法として、同年度卒業生のなかで、上から 5% 以内に入る者、10% 以内に入る者、15% の者等に分けて明示してもらうことが考えられる。

(7) 高等学校最終学年の学業成績と本学への合格率との間には、現役についても、浪人についても、ある程度関係があるが、十分に高くはない。また、現役と浪人とは、現役における相関係数の方が高い。これらの事実から考えると、入学試験の学力検査の結果には、相当大きな歪みと誤差とが含まれていると考えられる。しかし、それにも拘わらず、特に浪人における「受験勉強」の努力や、その成果に何等かの意義を見出すことも必要ではあるから、結局のところは、高等学校での成績を主とし、入学試験の学力検査を従とした判定方法を採用することが適当であると考えられる。

(8) 調査書に関しては、学業成績以外の、特に「人物」または「人格」に関する資料を利用する必要があるが、現状では、調査書の記載内容を合理的、实际的に利



## 大学入学試験に関する検討

用することも、また、それを全面的に信用することもできない。この点についての改善についての考案と実証的資料採取とは、次年度以降に行なうよう構想し、また、努力している。

(9) 学校差について若干の吟味を行なったが、学校差をどう定義するかにまず問題があるように思われる。また、いわゆる「有力校」と「その他」あるいは「中間校」などに分けて、主として、学力検査成績との関係を調べてみると、この意味での学校差は、高等学校在学中の成績で、大体平均4.5以上の評価を得ている者については、明確に存在するとはいえず、また、大体平均3.3以下の評価を得ている者については、ほとんど認められない。したがって、その意味での学校差は、評価の平均が3.4から4.4程度になるような、中間的な学力の者に見られるようである。しかし、学力検査における差が、大学入学後にも引続くものかどうかについては、次年度以降の課題として、吟味すべきである。

(10) 「浪人効果」について、また、若干の吟味を行なった。本学を二ケ年連続して受験した者のサンプルについて、「浪人効果」を規定する外面的条件を探したが、

はっきりしたものは得られなかった。浪人効果は、一方では、高校学校在学中の成績の高い者ほど大きく、また他方では、前年度の検査成績が高い者の方が大きいように見える。この点についての詳しい検討も、次年度に残された問題である。

(11) 入学試験の学力検査について、浪人の標本を利用し、一種の信頼性の検討を行なった。同一教科、科目の検査につき、二ケ年度の結果の相関を求めると、ほとんどが1%水準で有意な相関をもっているが、十分に高いものはほとんどない。数学、国語は特に低い。このような点から、学力検査が毎年同様な学力を測っているという保証は弱いのであって、これを入試判定の主力とすることには、さらに疑問が加わることになる。

### 文献

- (1) 続有恒；大学入学試験に関する検討(1)，名古屋大学教育学部紀要X（1963）
- (2) 国立教育研究所；大学入学試験に関する研究，国立教育研究所紀要（41）（1964）